

# 姚門における八股文の評価

浅井 邦昭

## はじめに

桐城派は姚鼐によってその地位を確立し、清朝の文学に大きな影響を与えた。彼は三十三歳で進士に及第し、四庫全書の編纂がはじまると、纂修官として参加している。しかし、当時の学術界において、漢学の優位はすでに顕著なものとなっていた。その風潮に反発した姚鼐は、乾隆三十九年（一七七四）に刑部郎中と四庫纂修官を辞し、江南を拠点として活動をはじめた。揚州の梅花書院など各地における講学を通じて、自身の文学主張を世に広めていったのである。乾隆四十四年（一七七九）の『古文辭類纂』は、その一つの成果である。これにより、彼の名声は高まった。つまり、この時期の姚鼐の活動によって、桐城派は文壇に認められるようになったのである。

彼が山長を務める書院には、多くの弟子が集まってきた。姚門の四傑と称される方東樹、劉開、梅曾亮、管同は、いずれも姚鼐が官を辞してからの弟子である。また姚瑩、陳用光、吳德旋なども、この時期に師事している。後に彼らはその文学主張を各地に伝え、桐城派の伝播に貢献するのである。

筆者は、これまで方苞や劉大櫟の文章理論において八股文が果たした役割を論じ、桐城派の形成過程を明らかにしてきた。従来の研究では、古文に関する主張が研究の対象となり、八股文との関係が積極的に論じられることはなかった。しかし、八股文の執筆は、清朝の知

識人が必ず経験する創作活動である。しかも方苞は『欽定四書文』編纂の中心人物であり、清朝八股文の規範づくりに大きな役割を果たしている。したがって、桐城派の形成において、八股文からの影響を軽視することはできない。

本稿では、姚鼐とその弟子たちの八股文との関わりについて、論じていくことにする。姚鼐もまた当時の知識人の一人として八股文を執筆し、自身の八股文集も刊行している。さらに弟子たちに対しても、古文以外に八股文の執筆を奨励している。姚鼐と八股文との関係については、王達敏『姚鼐與乾嘉學派』（二〇〇七年 學苑出版社）にすでに指摘がある<sup>1)</sup>。ただ王氏はあくまでも古文との関連に限定し、姚門における八股文について全面的に論じてはいない。

そこで、今回は姚鼐らの八股文に関する議論を取り上げ、姚門における八股文の位置づけについて考える。その上で、古文と八股文の関係について論じてみたい。

## 第一章 姚鼐と八股文

彼らの八股文に関する議論を考察する前に、本章では、姚鼐と八股文との関わりを見ておくことにする。鄭福照『姚惜抱先生年譜』によれば、彼は幼くして方澤から学問を学んだ。方澤は方東樹の曾祖父にあたり、その学問は朱子学を主としていた。また、このころ伯父の姚

範からは経学を、劉大櫟からは古文の法を学んでいた。

師の教えを受け、姚鼐は二十歳で郷試に及第する。その翌年には、上京し会試を受験している。八股文集『姚惜抱稿』自序には、乾隆十六年（一七五二）ごろの八股文に対する考えが記されている。

余少き時 時文を學ぶは擧に應ずる爲めなり。乾隆辛未壬申、京師に入り、劉海峰先生に見え、論ずる所の詩古文の法を聞き、甚だ喜ぶ。獨り爲る所の四書文に於いてのみ、意頗る之れを厭ふ。以謂らく是れ場屋の作爲るに過ぎざるのみ。奚ぞ此の異俗たる者を以て爲らんと。以て海峰先生に詢る。先生笑ひて應ぜざるなり。（姚鼐『惜抱軒稿』自序）

この引用によれば、彼は八股文を科挙のための手段と割り切っていた。この八股文に対する態度は、当時の知識人たちに共通するものである。当時、八股文は「敲門磚」とも呼ばれ、官僚への道が開ければ、その役目を終える道具と見なされていた。ここからは、若い姚鼐が、八股文に文学作品として価値を認めることができなかったことが読みとれる。

拙稿「劉大櫟の文論と八股文批評」において論じたように、劉大櫟の文章理論には八股文との密接な関係が見られる。そのため、彼は姚鼐に自身の八股文を示したのである。しかし、姚鼐はその意図を酌みとることができず、師へ不満を述べたのである。その後、姚鼐は乾隆十六年と翌年の会試にたてつづけに落第する。その数年後になって、彼の態度に変化が見られるようになる。先の引用に続いて、自序では次のように言う。

乙亥丙子に及んで、京師に在りて事無ければ、明の正嘉以前の文川の文章を爲る所以の旨とを見て、恍然として曰く、是れも亦た古文たるのみ。豈に二道たらんやと。是に於いて意を以て別に

経義數首を爲る。時に海峰 楚中に客たれば、寫して之れを寄す。海峰 書を以て復して曰く、曩に子の誤りたる言を聞くも、予の答へざるは、固より子必ず悟らんことを知ればなりと。（『惜抱軒稿』自序）

乙亥は乾隆二十年（一七五五）、丙子はその翌年である。このころ彼は三度目の会試にも落第し帰郷を考えていた。挫折の中で、姚鼐の八股文理解に変化が現れたのである。彼は明朝初期の作品を読みふけることで、八股文もまた古文にほかならないことを悟る。この発見は、後に八股文に対する中心的な主張となっていく。つまり、この時期になって、姚鼐の態度は一変したのである。

この八股文を古文の一形態と見なすのは、劉大櫟の主張でもあった。彼もまた「古文を談ずる者は、多く時文を蔑視す。此れも亦た古文の中の一體爲るべきを知らざればなり。要は功を用いること深く、世俗と轉移せざるに在り（談古文者、多蔑視時文。不知此亦可爲古文中之一體。要在用功深、不與世俗轉移）」（劉大櫟『劉海峰稿』「時文論」と言っており、八股文もまた古文にほかならないことを強調している。つまり姚鼐の発見は、師の八股文理解と同じであった。この自序には、師の理解に到達することができた喜びが述べられている。その後、彼は六度目の受験で進士及第を果たす。作風の変化が、姚鼐を及第へ導いたと考えられる。ここから、彼の八股文に対する理解は、劉大櫟から大きな影響を受けたと言えるのである。

及第した彼は、官界での生活をはじめめる。その間に、山東と湖南の郷試副考官を務め、乾隆三十六年（一七七二）には、恩科会試の同考官を務めている。しかし彼の官僚としての経歴は十年あまりで終わり、江南へ戻ることを余儀なくされた。同じ桐城出身の左眉は、そのころの姚鼐の活動について言及している。

時に遼東の朱孝純子穎 淮南鹽運司爲り。子穎故と先生と友爲り

て、亦た學を海峰に従ひ、詩を爲るに工みなり。書を以て延きて先生に梅花書院を主らんことを請ふ。暇ある時も亦た時文を爲れば、其の文、篇は股の如く、股は句の如くにして、眞に一筆の書たるに愧じざるなり。而も寥寥たる短篇の中に、具さに層疊疊嶂、烟雲變化の妙有り。歸熙甫より後、惟だ海峰及び先生のみ能く之れを爲る。此れ外人の爲に道ふに足らざるなり。(左眉『靜菴文集』卷二「夢穀先生傳」)

帰郷後、姚鼐はまず朱孝純の招きに応じて、梅花書院の山長に就任する。これ以後、彼は敬敷書院、紫陽書院、鍾山書院と活動の場を移し、八十五歳でその一生を終えている。「夢穀先生傳」によれば、書院時代の姚鼐は、暇を見つけては八股文を執筆していた。その八股文は、筆勢がとぎれることがなく、全篇を一つの対偶になぞらえることができ、その対偶も一文になぞらえることができるものであった。それだけでなく、短篇作品も、余韻が感じられるものであった。左眉はこのように絶賛した上で、彼と劉大櫟だけが歸有光の後継者と見なすことができるかと評価しているのである。姚鼐は江南において八股文の執筆に励み、作品は周囲から認められていた。しかも、その評価は詩や古文に劣らぬものであった。この伝記からは、彼のこうした八股文作家としての側面をうかがうことができるのである。

書院において、姚鼐は八股文の執筆だけでなく、その作品の刊行にも積極的であった。『惜抱先生尺牘』には、八股文集に関する言及が多く収録されている。例えば、彼は陳用光の求めに応じて「課讀文三部、惜抱軒稿三部、外稿一部、併奉寄、查收。」(『惜抱先生尺牘』卷六 三十一葉表「與陳碩士 七十四」)と、自身の著作を与えている。これらの著作はすべて八股文に関わるものである。「課讀文」は『敬敷書院課讀四書文』のことである。これは諸生に模範とすべき作品を選んだものであり、彼が書院において八股文の執筆を奨励したことを

示している。鄭福照の年譜によれば、この八股文選集は乾隆四十五年(一七八〇)に編まれ、明の隆慶年間から清朝にいたる八股文、二百五十一首を収録している。その方針は『欽定四書文』を基準とし、それ以後の作品と小題文を増補していると言う。続く『惜抱軒稿』『惜抱軒外稿』は、いずれも姚鼐の八股文集である。このほかに『課徒艸』という著作も現存している。書簡では複数送っていることから、これらは陳用光の閲覧に供するだけでなく、彼を通じてその著作を世に広めようとしていることがわかる。つまり姚鼐にとって、八股文の執筆は余技ではない。文壇の評価を得るための重要な表現手段だったのである。

従来の研究では、姚鼐の文学活動のうち特に古文に注目することが多かった。しかし今回見てきたように、彼は八股文の執筆についても古文に劣らず積極的だったことがわかる。もともと彼は当時のならいにしたがって、作品を執筆していた。しかし劉大櫟の教えによって、八股文を古文と見なすようになる。その結果、彼は八股文作家としての側面も持つようになったのである。ただ彼が八股文の執筆を特に強調するのは、さらに原因を考える必要がある。そこで次章では、姚鼐らがなぜ八股文を重視するようになったのか、その理由を見ていくことにする。

## 第二章 姚門における八股文重視と駢文の流行

前章において、姚鼐が八股文を古文と見なし、その重要性を強調するようになったことを明らかにした。ただし、『古文辭類纂』には八股文を収録しておらず、古文とするのは、あくまでも理念的な分類である。彼が古文として強調する背景には、当時の文壇との関係が影響を与えている。そこで、彼を八股文重視に導いた原因について見ていくことにする。

姚鼐は八股文の執筆に励んでいたが、その作品に対する自負も強いものであった。以下の陳用光への書簡には、そのことが示されている。

時文 石士の刻する所の六十篇を除くの外に、又た百廿餘篇を得。其の中の佳き者、荊川鹿門と抗行すべきに似たり。此の事 今日に在りては殆ど絶學と成らん。以らく俗人但だ科擧の文を作りて書を讀むを知る。古へを好むの君子、又た其の體の近きを以てして之れを輕んじ、爲らざれば知らず。此れ古文を作ること亦た何を以てか異ならんやと。（『惜抱先生尺牘』卷六 五葉表「與陳碩士 三十四」）

唐順之や茅坤は、歸有光と同じく明朝八股文の名手である。姚鼐はみずからの作品をこの二人に比肩できるものと称している。彼がこのように自負するに至ったのは、当時の八股文をとりまく環境に対する不満がある。俗人は科擧及第のために作品を執筆し、学識者は八股文の成立が遅いことを輕蔑して、執筆しようとしなない。その結果、彼が理想とする八股文は、もはや絶學の危機に瀕していた。彼が八股文の重要性を強調したのは、「絶學」という言葉に見られる危機感からである。つまり、彼は明朝八股文の後継者を自任することで、当時の危機を打破しようとしたのである。

姚鼐が危機感を懐いていたのは、八股文に対してだけではない。彼は文壇において孤立を深めており、当時の主流に対して、非常に強い不満を持っていた。これは弟子たちにとっても共通する想いであった。その一人である劉開は、文壇における師の地位を次のように述べている。

曩者に、吾が郷の望溪海峰諸先生、文章を以て天下の宗主と爲るは、數十年なり。是の時風氣未だ以て異なること有らざるなり。是れより以後、士 襲取を以て博と爲し、艱深もて古と爲し、排撃もて功と爲せば、其の所謂學術なる者は日に壞る。猥鄙を以て

性情と爲し、詭異を以て脱化と爲し、遠くに漢唐を遺れて近くに蕪陋を取れば、其の所謂風雅なる者は日に卑しく未だ已まざるなり。利を見れば則ち奮ひ、俗に徇ふもて能と爲し、其の身を立て己を行なふこと日に言ふべからず。凡そ此の數者は、皆な風氣の變の極まりたる者なり。夫れ極まれば則ち未だ復らざるること有らざるなり。姫傳先生既已に其の緒を持して力めて之れを救ふ。然れども退居を以てして世と異同を争ふことを欲せず。故に能く一綫を紛紜の中に存するも亦た卒に之れに勝ること莫きなり。（劉開『孟塗文集』卷三「致鮑覺生學士書」）

ここには、姚門の状況が描かれている。彼らから見れば、方苞と劉大魁以後の文壇は非常に混乱したものであった。ここでいう「學術」とは、漢学を指す。姚鼐は四庫全書館において漢学者と対立していた。その不満は江南へ帰ってからも薄れることはなかった。例えば、彼は『四庫全書總目』を入手した際に、紀昀の横暴を嘆いている。また「風雅」とは、袁枚らの詩を指すと思われる。彼は袁枚と深い交遊があったにも関わらず、その詩に対しては否定的であった。劉開は、姚門の立場から乾隆年間の文壇に対して批判を込めて概括しているのである。

姚鼐は、文壇の主流とは対立していた。しかし、劉開が言うように、その力には限界があり、彼は文壇に影響力を發揮することができなかった。そこで、彼は古文としての八股文の重要性を説いたのである。その目的は、漢学や当時の詩文と対抗するためであった。姚鼐の「停雲堂遺文序」（姚鼐『惜抱軒文集』卷四）では、八股文の文学的価値が強調され、当時の主流への対抗意識が見られる。それによれば、彼は当時の知識人が八股文を執筆しようとしなないことを嘆く。なぜなら彼らはそれを低俗な文章であると輕蔑していたからである。これに対し、姚鼐は八股文が漢学や詩文の何倍も優れていることを主張する。

苟し聰明にして才傑る者有りて、宋儒の學を守り、以て聖人の精に上達すれば、即ち今の文體にして、古への作者の文章極めて盛んなるの境に通せん。經義の體、其の高きこと詞賦箋疏の上に出づること、倍徒十百なるは、豈に言を待たんや。以て文章の至高と爲りて、又た國家法令の重んずる所を承くるべきも、而れども士乃ち反つて之れを視ること甚だ卑むは、歎ずべきなり。<sup>十一</sup>

(「停雲堂遺文序」)

才能ある者が八股文を執筆すれば、それは辞賦や箋注の何倍も優れたものとなる。なぜなら、八股文は聖人の教を広めるものであり、朝廷も重視する文章だからである。ここでいう「詞賦」とは駢文を指し、「箋疏」は漢学者の注解を指すと考えられる。当時、駢文は盛んに執筆され、姚鼐の周囲にも、袁枚や孔廣森などの名手が存在していた。こうした風潮に対し、姚鼐は八股文の優位を説くことで、当時の主流に対抗することを試みた。八股文の文学的価値を強調することで、みずからの地位を確保しようとしたのである。

この「停雲堂遺文序」では、漢学とともに駢文が八股文と比較されている。それは駢文が漢学者に好まれ、両者の間に深いつながりが見られるからである。姚鼐は駢文作家が六朝文学へ傾倒することに批判的であった。例えば、駢文作家の一人である凌廷堪について、姚鼐への書簡で次のように批判する。

吾世に孤立し、今日の云ふ所の漢學諸賢と趣きを異にす。然れども近ごろ亦た頗る吾が説の是爲るを知る者有り。渾潦既に盡くれば、正流必ず顯れん。此れ事理の必然なる者のみ。文章の事に至りては、諸君も亦た了れども未だ解せず。凌仲子の文選を以て文家の正派と爲すに至りては、其の笑ふべきこと此くの如し。<sup>十二</sup>

(『惜抱先生尺牘』卷八 十四葉表「與石甫姪孫 七」)

姚鼐にとって、文学の正統は『史記』以来の古文であった。ところ

が、彼の主張する古文は、漢学隆盛の当時において理解が得られなかった。そこで凌廷堪の『文選』への傾倒を徹底的に否定したのである。最初に漢学について言及しているのは、駢文を漢学者が好む文章として意識しているからであろう。その上で、彼は漢学者の駢文をみずからの古文と対立させたのである。この書簡からは、姚鼐の学術と文学における対抗意識を読みとることができる。

しかしながら、姚鼐が駢文を批判する際には、古文とではなく、八股文と比較しながら議論することが多い。先の「停雲堂遺文序」以外にも、しばしば駢文を八股文と比較しようとする記述が見られる。その例として、鮑桂星への書簡を取りあげる。ここでは「假如其人能く時文を作れば、亦た即ち取るべし。今世の時文の道、殆ど絶學と成れり。諸君子の之れを視ること太だ卑しむに由るなり。夫れ四六文學の美を害はざるも、時文の體、豈に四六より尊からざらんや(假如其人能作時文、亦即可取。今世時文之道、殆成絶學矣。由諸君子視之太卑也。夫四六不害文學之美、時文之體、豈不尊於四六乎。)(『惜抱先生尺牘』卷四 十七葉裏「與鮑雙五 十六」と言う。姚鼐がここで八股文を比較対象としたのは、それが駢文と同じく対偶によって作品を構成しているからである。彼は当時の八股文軽視に反発し、文学としての美しさにおいても、八股文は決して駢文に劣ることはない」と主張している。これは漢学者の駢文に対し、みずからの八股文を上位に置こうとする試みである。姚鼐にとって、八股文は当時の主流より優位に立つたための表現手段だったのである。

彼が八股文の優位を主張するのは、漢学への対抗意識以外に、八股文の流行への反発がある。乾隆四年(一七三九)、方苞らは乾隆帝の命を奉じて『欽定四書文』を編纂した。それ以後、これが八股文の執筆基準となってきた。姚鼐もまた『欽定四書文』に基づいて『敬敷書院課讀四書文』を選定している。しかし乾隆後期にさしかかると、考

官の採用基準に大きな変化が見られるようになった。『制義叢話』には、乾隆三十七年（一七七二）の進士、孫辰東について次のように述べている。

王東溍曰く、孫状元辰東、原名は曙故、字は扶桑なり。諸生爲りし時、好みて駢體を以て制義を爲る。時に呉中に文社の同聲と曰ふ有りて、孫之れが領袖と爲る。同社多く其の體に效ひ、風氣之れの爲めに一變す。選する所の丁亥房書、名づけて了閑と曰ひ、悉く六朝の麗語にして、海内に風行す。<sup>十三</sup>（梁章鉅『制義叢話』卷二十三）

ここには、駢文が八股文に与えた影響が記されている。孫辰東は正しくは状元でなく会元であり、殿試では一甲第二名の榜眼となった。しかし科挙において高位で及第した点に変わりない。彼は及第する以前から駢文によって八股文を執筆していた。そしてその八股文は次第に同調者を生み、ついに考官の基準にも影響を与えた。その結果、彼は榜眼として及第できたのである。ここからは、駢文による八股文が挙子たちにもはやされたことがうかがわれる。そうなったのは、文壇における駢文の隆盛が、八股文へも影響を与えていったためと考えられる。この孫辰東の例からもわかるように、乾隆後期には八股文の流行に大きな変化が現れたのである。

孫辰東が及第した乾隆三十七年には、姚鼐はまだ官僚生活を送っていた。その前年の恩科会試では、彼は同考官を務めている。したがって、当時の八股文の流行に関しても熟知していたに違いない。八股文は科挙及第という明確な目的があるため、挙子は特に流行に敏感である。科挙において駢文による八股文が公認されたことは、姚鼐に危機感を懐かせたであろう。先に見た凌廷堪の『文選』傾倒に対する批判も、孫辰東が六朝文学の詞藻を八股文に導入したと重ねあわせれば、当時の流行に対する危機感の表れとも見なすことができる。だか

らこそ、姚鼐は八股文が古文にほかならないことを強調したのである。流行の変化に対し、彼は明朝以来の八股文を復興することで、駢文からの影響を排除しようと考えたのである。

以上、当時の文壇との関係を確認しながら、姚鼐の八股文に対する主張を見てきた。乾隆後期には、八股文の流行に大きな変化が現れた。彼は古文としての八股文を駢文と対峙させることで、その変化を押しとどめようとしたのである。駢文に対し八股文の優位を示すためには、みずからの正統性を示す系譜を用意する必要があった。姚門の古文では、歸有光以降、方苞から劉大樞を経て姚鼐にいたる系譜が意識されていた。彼らにとつて、これが自分たちの正統性を示すものだったのである。ところが八股文における系譜は、必ずしも古文と同じではない。そこで次章では、姚門における八股文の継承について考えていくことにする。

### 第三章 八股文における系譜

先に見たように姚鼐は、明朝八股文の継承者であることを自任していた。歸有光や唐順之らの絶学を、乾隆嘉慶において復興することをめざしたのである。彼がそう主張するのは、漢学の隆盛や駢文による八股文の流行に危機を感じていたからである。そのために、古文としての八股文の正当性を強調したと考えられる。ここで、清朝における八股文の系譜が問題となる。なぜなら、明朝の作者から自分たちへつなく道筋を示す必要があるからである。ただし、姚鼐は八股文の系譜を、古文のように明確なかたちで示していない。そこで弟子たちの議論のうち共通する部分を取りだして論じていく。

古文においては、『古文辭類纂』によって姚鼐の意図が明らかとなっている。明において歸有光のみが、清においては方苞と劉大樞が取りあげられており、彼らが古文の継承者であることが示されている。こ

れは弟子たちにも共有されていた。例えば、方東樹は「近世の論者謂らく、八家の後、明に於いては歸太僕震川を推し、國朝に於いては方侍郎望溪、劉學博海峰、以及先生をして三とすと（近世論者謂、八家後、於明推歸太僕震川、於國朝推方侍郎望溪、劉學博海峰、以及先生而三焉）」（方東樹『攷槃集文録』卷五「惜抱先生墓誌後」と言い、劉大櫪に続けて姚鼐の名をあげている。姚門においては、歸有光から方苞、劉大櫪を経て、自分たちへ至る古文の系譜が意識されたのである。

ところが、八股文における系譜は、古文とは必ずしも共通しない。その系譜を最も端的に示しているのは、吳徳旋の言葉である。それによれば「蓋し我が朝 李厚菴創めて復古の學を爲め、其の言固より漢人の經を説くの文と相い表裏してより、劉海峰竇東臯 古文の遺風を得。其の言の美も亦た李氏に減せず（蓋我朝自李厚菴創爲復古之學、其言固與漢人説經之文相表裏、而劉海峰竇東臯得古文遺風。其言之美亦不減李氏）」（吳徳旋『初月樓文鈔』卷四「四書文選序」とあり、明朝の八股文は、李光地を経て竇光鼐と劉大櫪へ伝えられたことが示されている。

第一章で見たように、姚鼐の八股文は劉大櫪から深い影響を受けていた。また左眉の「夢穀先生傳」では、劉大櫪と姚鼐を歸有光の後継者と見なしている。つまり姚門においては、歸有光らの八股文が、李光地に伝えられ、竇光鼐、劉大櫪を経て、姚鼐へ受け継がれたと考えられていたのである。ここで、古文の系譜と比較してみると、劉大櫪は共通するものの、李光地と竇光鼐が加えられ、方苞が外されている。李光地に加えられたのは、彼が清朝を代表する八股文作家だからである。例えば、『制義叢話』には『四勿齋隨筆』を引いて「安溪の李文貞公、相業 我が朝の冠爲りて、其の制義も亦た是れ我が朝の領袖たり。已に宸褒を奉ずれば、士林復た異議無し。（安溪李文貞公、相業

爲我朝之冠、其制義亦是我朝領袖。已奉宸褒、士林無復異議。）」（『制義叢話』卷九）とあり、彼は朝野を問わず八股文の正宗と見なされていた。したがって、姚門の系譜においても彼を加えたと考えられる。しかし、その後に加えられた竇光鼐と劉大櫪は、一般の評価とは大きく異なる。そこで、まずは劉大櫪の八股文について見ていくことにする。

『惜抱軒稿』自序で見たように、姚鼐は劉大櫪の八股文を信奉していた。この評価は弟子たちにも伝えられている。彼らもまたその八股文を高く評価した。吳徳旋は、劉大櫪の八股文に対する当時の評価を、次のように言う。

桐城の劉海峰先生 詩古文を以て重名を雍正乾隆の間に負ふ。然るに其の平生著述の尤も善き者は、經義なり。海峰の經義、妙たるは莊周史記の遺を得るも、之れを知る者は鮮く、之れを知りて能く之れを好む者は尤も鮮し。而れども余が族弟敬承、獨り能く知りて之れを好む。夫れ經義の古文と、未だ嘗て異有らざるなり。世の人岐ちて之れを視るは、吾 其の何故なるかを解せざるなり。然れども是の説を持して以て人に語れば、人之れを嗤笑して、之れを擯斥せざる莫し。此れ海峰の文、之れを知る者鮮く、之れを知りて能く之れを好む者尤も鮮き所以なり。<sup>十四</sup>（吳徳旋『初月樓文續鈔』卷三「劉海峰先生經義鈔目錄序」）

吳徳旋は、劉大櫪の詩古文が文壇に評価されたと言う。しかし、実際にその影響力は限定的であった。なぜなら、彼は終生及第することができず、晩年によく黟縣教諭に就いたにすぎないからである。彼の八股文に対する世間の評価は、さらに低いものであった。吳徳旋は、その八股文を詩古文に勝ると評価しているが、この序からは、その同調者がほとんど存在しなかったことがうかがわれる。ここには劉大櫪の八股文に対する評価が、世間と姚門との間で著しく異なってい

たことが示されている。

世間と姚門の認識の違いは、劉大櫚のみに止まらない。姚門における八股文の主張すら、世間は認めていなかったのである。吳徳旋は、八股文は古文と異ならず、別の文章と見なすべきではないと説く。これは、劉大櫚や姚鼐の主張を継承したものであり、姚門における八股文理解の根幹である。ところが、彼が持論を語ると、周囲に笑われる結果となった。前章で見たように、当時は駢文による八股文が流行していた。その中で、古文として八股文を執筆するのは、趨勢に逆らうものだったのである。この文章からは、劉大櫚に対する評価が、世間と姚門との間で対立があったことが読みとれる。つまり、劉大櫚を八股文の系譜に加えたのは、姚門に特別な意図があったと言えるのである。

吳徳旋の「四書文選序」では、李光地の後継者として、劉大櫚とともに竇光鼐の名をあげている。姚門においては、吳徳旋以外にもしほしほ竇光鼐を八股文の系譜に加えており、彼らの共通認識であることがうかがわれる。その例として、陳用光による八股文の系譜を見ておくことにする。

我が朝李文貞公の制義、前明の化治正嘉の體格を以て、國初に倡へ、而して乾隆年間、山左は則ち竇東臯先生之れを繼ぐ。東臯と先後 時を同じくする者は、桐城は則ち劉海峰大櫚、姚姬傳先生鼐、長州は則ち彭尺木紹升、新城は則ち吾が舅氏魯山木先生仕驥、而して山左は則ち閻懷庭循觀、韓理堂夢周なり。皆な能く經旨を探求し、傳ふるに心得を以てし、而も體格は則ち一に之れを範とするに古文辭を以てす。<sup>十五</sup>（陳用光『太乙舟文集』卷六「南石先生制義序」）

この序は、吳徳旋のものよりさらに詳しい。彭紹升や魯仕驥など、ここに言及されている人物は、姚鼐と書簡を交わすなど、いずれも姚

門と非常に近い関係にあり、いわば姚門の同調者である。彼らは、みな古文によって八股文を執筆していた。その中心人物とされるのが、竇光鼐なのである。

竇光鼐は五十年にわたって官界で活躍し、ついには左都御史まで進んでいる。その文章については、秦瀛が「都察院左都御史竇公光鼐墓誌銘」（『碑傳集』卷三十八）において、「蓋し公の詩は少陵に似、古文は昌黎の如く、制義は則ち聖賢の義理を發揮し、自ら一家の文を成すと云ふ（蓋公詩似少陵、古文如昌黎、制義則發揮聖賢義理、自成一家之文云）」と記している。つまり、彼は当時において八股文の名手と称される人物であった。竇光鼐の執筆方針は、姚門の主張と同じである。その例としては「前輩始めて作るに、直だ講義に類す。作者漸やく盛んにして、乃ち行らすに古文の法を以てし、遁相祖述するに、皆な規矩を以てするなり（前輩始作、直類講義。作者漸盛、乃行以古文之法、遁相祖述、皆以規矩也）」（竇光鼐『省吾齋稿』「論文五則第三則」）があげられる。ここで彼は、明朝の八股文が古文の法によって執筆されていることを評価しているのである。

姚門において竇光鼐が特に重視されたのは、彼を劉大櫚と結びつけようとしたからである。二人は密接な関係を持ち、とりわけ八股文において深い交流が見られる。その証拠として、二人の八股文集には互いの批評が収録されている点があげられる。『省吾齋稿』は、劉大櫚の批評を四十三条収録し、これはほかの評者に比べて極めて多い。一方、『劉海峰稿』は、竇光鼐の批評を二条のみ収録するが、その際には「竇東臯先生」と敬称をつけている。これは劉大櫚が師事した方苞や吳士玉と同じである。したがって、劉大櫚は彼に師事したか、そうでなくとも極めて敬意を持ちながら交遊していたことがうかがわれる。つまり二人は主張を同じくするだけでなく、師弟に近い関係であったのである。

先に見たように、劉大櫔の八股文は世間からほとんど評価されていなかった。しかも李光地と劉大櫔の間には、古文における方苞のような師承は見られない。これは姚門が八股文の系譜を主張する上で、不利な状況である。そこで寶光鼐を加えたと推測できる。彼は長く官界で活躍し、文壇に影響力を持っていた。しかも、八股文においては、劉大櫔との師承を主張できる関係にあった。吳徳旋や陳用光が彼を加えたのは、李光地と劉大櫔の仲介者としての役割を期待したためと考えられる。そうすることで、八股文の系譜に説得力を持たせ、師である姚鼐の正当性を主張しようと試みたのである。

ここまで八股文における系譜を見てきた。この系譜で注意すべきは、方苞が外されていたことである。彼もまた「張惕菴曰く、國初の制義、安溪望溪二先生を以て極則と爲すと（張惕菴曰、國初の制義、安溪望溪二先生爲極則）。」（『制義叢話』巻九）とあるように、清朝八股文の泰斗であり、八股文の系譜に加えられるべき人物である。しかしながら、姚門では、なぜか方苞を八股文の系譜に加えていない。例えば、吳徳旋は「國朝の時文を以て名家たる者衆し。予の見る所によれば則ち李光地、方舟、劉大櫔、寶光鼐、最も其の善き者なり（國朝之以時文名家者衆矣。自予所見則李光地、方舟、劉大櫔、寶光鼐、最其善者也。）」（『初月樓文鈔』巻四「族叔晉望時文文集序」）と清朝八股文の名手をあげている。ここでも、方苞ではなく方舟を加えている。方舟は方苞の兄であり、「二方」と並称された。ただし諸生のまま亡くなったため、八股文作者としての知名度は、弟に遠く及ばなかった。この人選から見れば、彼らがあえて方苞を外したと推測できるのである。そこで次章では、なぜ方苞が系譜から外され、二つの系譜に違いが生じたかについて論じることにする。

#### 第四章 古文と八股文の系譜

姚門では、八股文の系譜に方苞を加えることはなかった。彼らは八股文は古文にほかならないと主張しながら、別の系譜を作り出したのである。一方で、姚鼐らは方苞の八股文についてその重要性を認めていた。第一章で見たように『敬敷書院課讀四書文』では、『欽定四書文』を基準としている。これは八股文における方苞の權威を認めていたことを示している。また、姚鼐はみずからの八股文を評して「望溪に似たり（似望溪）。」（『惜抱軒課徒艸』「可與共學未可與適道」評）とも言っている。方苞の八股文は、模倣の対象にもなっているのである。こうした状況を考えれば、方苞を系譜から外したのは、意図的なものであったと考えられる。そこで、まずは方苞の義法に対する姚鼐の評価を見ておくことにする。

現存する文章において、姚鼐が義法に言及することは、それほど多くはない。しかも、その評価は限定的である。以下、義法に関する議論として最も詳細なものを見ていくことにする。

震川の文を論ずるの深き處、望溪尚ほ未だ見ず。此の論甚だ是たり。望溪の得る所 本朝の諸賢に在りて最も深しと爲すも、之れを古人に較ぶれば則ち淺し。其の太史公書を閲るに、精神其の大ひなる處、遠き處、疏淡たる處、及び華麗にして常に非ざる處を包括する能はずに似たり。止だ義法を以て文を論ずれば、則ち其の一端を得るのみ。然れども文家の義法も亦た講せざるべからず。梅崖の如きは便ち細さに繩墨を受くる能はざれば、望溪に及ばざるなり。<sup>十六</sup>（『惜抱先生尺牘』巻五 七葉裏「與陳碩士 一」）

姚鼐は、方苞が清朝において最も文章理論に通じていることを認めている。ただ、歸有光と比べれば、まだ浅薄なものにすぎず、『史記』の魅力すべてを明らかにしているとは言えないとする。それが義法の限界なのである。ここでは歸有光と方苞が比較されている。別の書簡

では、彼は特に歸有光の『史記』に対する理解を評価しており、これを見ることで、両者の違いが明らかになる。

夫れ文章の事、言諭すべき者有り、言諭すべからざる者有り。言諭すべからざる者、要は必ず言諭すべき者より之れに入る。韓昌黎柳子厚歐蘇の言ふ所の文を論ずるの旨、彼固より人を欺くの語無し。後の文を論ずる者、豈に能く更に以て之れを踰ゆること有らんや。夫の其れ言諭すべからざる者の若きは、則ち久しく之れを爲りて自得するに在るのみ。震川闕本の史記、文を學ぶ者に於いて、最も有益爲り。圈點は人を啓發すれば、意解説に愈る者有り。<sup>七</sup>（『惜抱軒先生尺牘』卷一 十一葉表「答徐季雅」）

これによると、文章には、語ることができる部分と、できない部分がある。語ることができない部分を理解するためには、必ずできる部分から始めなければならない。そして、語ることができない部分については、みずから悟るしかないのである。その点で、歸有光が評閲した『史記』は、有益である。圈点を用いることで、くぐくくだ解説するよりすぐれている場合があるからである。

この議論に基づいて、陳用光への書簡を見れば、歸有光と方苞の違いがよくわかる。方苞の義法は、ここでいう「可言論者」である。義法は必ず追求しなければならないが、それだけでは文章のすべてを理解することができない。その語ることができない部分とは、先の引用における『史記』の遠大疏淡華麗非常な魅力である。その点では、歸有光の評閲した『史記』には及ばないのである。だからこそ、姚鼐は義法の限界を認めるものの、文章を論ずる際には、必ず義法を追求しなければならぬと説くのである。

この二つの書簡から、姚鼐の義法に対する理解を知ることができる。彼にとつて、文章理論はあくまでも入口にすぎない。すぐれた文章を理解するためには、作品に長く親しんで会得するしかないのである。

これが『古文辭類纂』を選定した理由の一つであろう。だからこそ、姚鼐は、義法についてあまり言及することがなかったのである。

ただし、弟子たちの間では、義法がしばしば言及されるようになる。例えば、方東樹は劉開が姚鼐に師事した経緯について「孟涂 書を上りて自ら通ず。姚先生見て驚異し、因りて授くるに文章の義法を以てす（孟涂上書自通。姚先生見而驚異、因授以文章義法）。」（『攷槃集文録』卷十一「劉君應臺暨夫人吳氏合葬墓誌銘」と言っている。これは古文の義法についての記述である。これによれば、姚鼐も弟子の教育において義法を活用していたのである。

姚門において、義法は八股文においても活用された。例えば、陳用光は浙江学政となった際、道光十三年（一八三三）に『敬敷書院課讀四書文』を重刊している。その序において、彼は「其の能く進みて先輩の義法を求め卑近に囿らざる者有れば、已に翹然として其の異を衆に負ふ（其有能進求先輩之義法而不囿於卑近者、已翹然負其異於衆矣）。」（『太乙舟文集』卷六「重訂姚先生四書文選」と言う。『敬敷書院課讀四書文』は、姚鼐の選による。その序において義法に言及するのは、姚鼐の教えに適うものと考えられる。したがって、方苞の文章理論は、姚門において十分に認められていたと考えられる。そこで、改めて姚門における方苞の評価について見ていくことにする。

実は、姚鼐は方苞の八股文理解についてもある程度評価していた。管同への書簡には、方苞と李光地に関する議論がある。そこでは、東晋六朝の墓誌銘や唐朝の贈序は「時文」であっても、韓愈が執筆すれば古文となり、同じように、明朝の八股文や寿序は「時文」であっても、歸有光が執筆すれば古文となる。このように、歸有光の作品を評価した上、李光地と方苞の歸有光評価について議論を続ける。

古文を作る者は、熙甫の後に生まれて、若し經藝を解せずんば、便ち是れ缺陷たり。本朝 李安溪の如きも、見る所時文より出で

ず、其の熙甫を評論するに、滿口亂道と謂ふべきなり。望溪は則ち之れに勝れり。然るに古文時文の界限に於いて、猶ほ未だ清らかならぬ處有り。大抵 時文家より逆ひて經藝を追へば、古文の理甚だ難し。若し本と古文を解し、直だ取りて以て經義の體を爲れば、則ち功と爲すこと甚だ易し。數月を過ぎざるの内に成すべきなり。<sup>十六</sup>。〔惜抱先生尺牘〕卷四 二十四葉表「與管異之 四」

ここでは古文の執筆が八股文理解においても重要であることを説いている。前章で見たように、八股文の系譜において、李光地は歸有光の後継者と位置づけられた。それにも関わらず、歸有光の文章に対する評価はでたらめだと言う。彼が八股文作者としての立場から離れることができなかったためである。方苞は李光地に勝るが、古文と八股文との境界については区別できない部分があると評する。そのため、歸有光の文章を正しく評価できない。つまり、ここでは二人とも限定的な評価しか与えられていないのである。

このように、二人が限定的な評価しか与えられないのは、姚門に二つの系譜が生まれたことと関係がある。なぜなら、姚鼐は劉大魁以外の清朝の大家に対して、極めて厳しい態度で臨み、全面的に肯定することがなかったからである。これまで見てきたように、方苞に対しては、あくまで清朝に限定した評価であり、古人とは比較の対象にならない。同じように、李光地と戴震に対しても厳しい評価を下している。

李安溪未だ是れ眞の道學ならずと雖も、而れども論ずる所の義理は自ら取るべし。而れども侈りて文章を言ふは乃ち殊に笑ふべし。戴東原の考證を言ふは、豈に佳からざるや。而れども義理を言ひて、以て洛閩の席を奪はんと欲するは、愚妄にして自ら量らざるの甚しきと謂ふべし。此の理を執りて以て前人を論じ、即ち是れを以て今時の名士を裁斷すれば、當に亦た甚だしくは遠からざるべきのみ。<sup>十九</sup>。〔惜抱軒先生尺牘〕卷六 二十二葉表「與陳碩士

#### 五十六)

彼は李光地を眞の道学者ではないと断じている。程朱とは比べものにならないと言うのであろう。あくまで彼の義理に関する議論のみを評価する。その文章理論に至っては、全く評価の対象になっていない。一方、戴震については、考証のみ評価の対象となる。義理については、身の程知らずと決めつけている。つまり、二人に対しては、一つの分野における評価しか与えていないのである。

この引用からは、「述菴文鈔序」〔惜抱軒文集〕卷四)における有名な「鼐嘗て學問の事を論ずるに、三端有り。曰く義理なり、考證なり、文章なりと。是れ三者苟し善く之れを用いれば、則ち皆な以て相濟くるに足る。苟し善く之れを用いざれば、則ち或ひは相い害ふに至らん(鼐嘗論學問之事、有三端焉。曰義理也、考證也、文章也。是三者苟善用之、則皆足以相濟。苟不善用之、則或至於相害)。」という議論が想起される。これは姚鼐の学問観を最も良く示したものとされる。つまり、李光地は義理しか評価されず、戴震は考証のみ評価される。これに加わるのが方苞である。彼は文章のみが評価の対象とされた。つまり、姚鼐は三者の兼修を理想としたが、その要求は非常に高く、清朝においてはその理想を体現するような人物は存在しない。李光地や方苞といえども、姚鼐からみれば一つの分野に傑出したにすぎなかったのである。

これまでの議論を踏まえて、改めて八股文と古文の系譜について考えてみる。明朝の歸有光は、八股文と古文のいずれの系譜にも加えられた。八股文は聖賢の義理を發明する文章であり、古文は文章理論にしたがって執筆する必要がある。つまり、姚門においては、歸有光を義理と文章に傑出した人物と位置づけたのである。ところが、清朝においてはそのような人物は存在しない。姚鼐の眼から見れば、李光地は義理、方苞は文章のみと一つの分野でしか評価できないのである。

ここに、二つの系譜に違いが生まれた原因がある。限定的な評価である二人を、八股文と古文の二つの系譜に加えることはできなかったのである。

二つの系譜をふたたび合流させたのは、劉大魁である。つまり、劉大魁は義理と文章のどちらにも通じた人物ということになる。したがって、彼から教えを受けた姚鼐は、義理と文章の理想を体現していることになり、姚門の正統性を示すことになったのである。このような二つの系譜が生まれた背景には、漢学者への批判がある。姚鼐は「近ごろ士大夫侈りて漢學を言ふも、只だ是れ考證の一事なるのみ。考證固より廢すべからざるも、然れども安んぞ宋の大儒の得る所の者と并論するを得んや（近士大夫侈言漢學、只是考證一事耳。考證固不可廢、然安得與宋大儒所得者并論）。」（『惜抱軒先生尺牘』卷一 二十葉表「與汪稼門 十六」）と言っており、漢学者が考証のみに止まることを批判している。だからこそ、姚門においては、古文と八股文の兼修をめぐしたのである。文章たる古文に加え、義理を表現する八股文の理想を追求することで、当時の主流を占める漢学者より優位に立とうとした。つまり、姚鼐の学問観と漢学への批判的態度が、姚門に義理と文章の系譜を生み出させたと言えるのである。

ここまで、方苞と李光地に対する評価に注目して、二つの系譜に違いが生じた理由について考えてきた。この後、姚門は特にその古文が評価されたため、方苞から劉大魁そして姚鼐にいたる系譜が広く認められるようになった。それには『古文辭類纂』の普及が大きな役割を果たしている。その結果、後世に桐城派と呼ばれる追隨者を生み出したのである。

ところが、姚門においては、義理の系譜も存在した。それは李光地から竇光鼐、劉大魁を経て姚鼐へつながる八股文の系譜である。しかし、それは漢学の優勢を覆すことはできず、世間に受け入れられるこ

とはなかった。それは、姚鼐の八股文が追隨者を生まなかったからである。古文と八股文、この二つの系譜は、姚門と文壇との対立関係の中から生まれたのである。

#### おわりに

以上、姚鼐とその弟子の議論を見ながら、姚門における八股文の位置づけを見てきた。姚鼐らは、八股文の重要性を盛んに主張したが、その背景には、当時の主流に対する対抗意識が存在した。学術においては漢学の隆盛、文学においては駢文の流行、そして八股文における採用基準の変化である。彼らは当時の状況に危機感を感じ、明朝八股文の絶学を復興することをめざしたのである。それは古文としての八股文であった。彼らにとつて、八股文はみずからの立場を明らかにするために必要な表現手段だったのである。そのため、姚門において、八股文は古文に劣らず重要視されたのである。

彼らの主流に対する対抗意識からは、古文と八股文という二つの系譜が生まれた。この系譜は、姚鼐が主導したのではなく、弟子たちが師の意向を酌んで作成したと推測される。その結果、劉大魁が重要な位置づけをされるのに対し、方苞と李光地は一つの系譜にしか登場せず、限定的な評価しかされなかった。これは、姚鼐が清朝の知識人に対して寛容でなかったことが反映している。この二つの系譜によって、姚鼐にいたる絶学の道筋を明らかにし、漢学者より優位に立とうとしたのである。

これまで、姚門と文壇との関係に注目して、八股文の位置づけを考察してきた。今回、おもに姚鼐の八股文に対する評価を論じ、弟子の議論については、師が言及していない部分を補うかたちで採用した。弟子については共通する部分を取り出してきたので、彼らの八股文に対する評価の違いには踏み込んでいない。当然、それぞれ八股文に対す

る態度は異なるし、そこから受けた影響も異なる。この点については、今後の課題としたい。

一 拙稿「方苞の「義法」と八股文批評」(二〇〇一年 『日本中国学会報』第五十三集)「劉大樞の文論と八股文批評」(二〇〇六年 『金城学院大学論集』人文科学編第二巻第二号)

二 王達敏「姚鼐與乾嘉學派」第八章 桐城學人群體的形成」二〇三頁

ここでは、姚鼐の八股文重視について、明言されている理由を三点、潜在的理由を一点挙げている。明言されているのは、「八股文は古文の一形態である」「八股文は古文と密接な関係にある」「科擧の需要がある」である。潜在的理由は、彼が漢学が八股文に侵入するのを防ぐためである。その一例として、朱珪が漢学者である江永の学説を用いた答案を採録したことを姚鼐が批判したことをあげている。

三 引用の『惜抱軒稿』は上海図書館所蔵抄本に基づく。

「余少時學時文爲應舉。乾隆辛未壬申、入京師、見劉海峰先生、聞所論詩古文法、甚喜。獨於所爲四書文、意頗厭之。以謂是不過爲場屋作耳。奚以此異俗者爲。以詢海峰先生。先生笑而不應也。」

四 「及乙亥丙子、在京師無事、取明正嘉以前文盡讀之。乃見初立經義本體與荆川震川所以爲文章之旨、恍然曰、是亦古文耳。豈二道哉。於是以意別爲經義數首。時海峰客楚中、寫寄之。海峰以書復曰、曩聞子誤言、予不答者、固知子必悟也。」

五 「時遼東朱孝純子類爲淮南鹽運司。子類故與先生爲友、亦從學于海峰、而工于爲詩。以書延請先生主梅花書院。暇時亦爲時文、其文、篇如股、股如句、真不愧一筆書也。而寥寥短篇中、具有層巒疊嶂、烟雲變化之妙。自歸熙甫後、惟海峰及先生能爲之。此不足爲外人道也。」

六 以下の『惜抱先生尺牘』は宣統元年の小萬柳堂重刊本を用いる。テキストには同一人に対する複数の書簡が収録されているため、これのみ特に引

用部分の葉数まであげておく。

七 「時文除石士所刻六十篇之外、又得百廿餘篇。其中佳者、似可與荆川鹿門抗行。此事在今日始成絕學。以俗人但知作科擧之文而讀書。好古之君子、又以其體近而輕之、不爲不知。此與作古文亦何以異哉。」

八 「曩者、吾鄉望溪海峰諸先生、以文章爲天下之宗主者、數十年。是時風氣未有以異也。自是以後、士以襲取爲博、艱深爲古、排擊爲功、其所謂學術者日壞。以猥鄙爲性情、以詭異爲脫化、遠遺漢唐而近取燕陋、其所謂風雅者日卑而未已也。見利則奮、徇俗爲能、其立身行己日不可言。凡此數者、皆風氣之變之極者也。夫極則未有不復者也。姬傳先生既已持其緒而力救之矣。然以退居而不欲與世爭異同。故能存一綫於紛紜之中而亦卒莫之勝也。」

九 「去秋始めて四庫全書目一部を得て之れを閲る。其の持論大いに公平ならず。鼐京に在りし時、尚ほ未だ紀曉嵐の猖獗、此くの若くの甚しきを見ず。今此れを觀れば則ち略ぼ忌憚無きなり。豈に世道の爲めに憂へざらんや(去秋始得四庫全書目一部閱之。其持論大不公平。鼐在京時、尚未見紀曉嵐猖獗、若此之甚。今觀此則略無忌憚矣。豈不爲世道憂耶)。(『惜抱先生尺牘』卷三 十葉裏「與胡雒君 十六」)

十 「今日の詩家大いに榛塞と爲れば、通人と雖も、具さに正見する能はず。吾斷じて樊榭簡齋、皆な詩家の惡派なりと謂ふ。此の論出でて、必ず大いに世の爲めに怨怒せん(今日詩家大爲榛塞、雖通人、不能具正見。吾斷謂樊榭簡齋、皆詩家の惡派。此論出、必大爲世怨怒)。(『惜抱先生尺牘』卷四 十一葉表「與鮑雙五 三」)

十一 「苟有聰明才傑者、守宋儒之學、以上達聖人之精、即今之文體、而通乎古作者文章極盛之境。經義之體、其高出詞賦箋疏之上、倍徙十百、豈待言哉。可以爲文章之至高、又承國家法令之所重、而士乃反視之甚卑、可歎也。」

十二 「吾孤立於世、與今日所云漢學諸賢異趣、然近亦頗有知吾說之爲是者矣。渾潦既盡、正流必顯。此事理之必然者耳。至於文章之事、諸君亦了未

解。凌仲子至以文選爲文家之正派、其可笑如此。」

十三 「王東澂曰、孫狀元辰東、原名曙故、字扶桑。爲諸生時、好以駢體爲制義。時吳中有文社曰同聲、孫爲之領袖。同社多效其體、風氣爲之一變。所選丁亥房書、名曰了閑、悉六朝麗語、風行海內。」

十四 「桐城劉海峰先生以詩古文負重名雍正乾隆間。然其平生著述之尤善者、經義也。海峰經義、妙得莊周史記之遺、而知之者鮮、知之而能好之者尤鮮。而余族弟敬承、獨能知而好之。夫經義之與古文、未嘗有異也。世之人岐而視之、吾不解其何故也。然而持是說以語于人、人莫不嗤笑之、擯斥之矣。此海峰之文、所以知之者鮮、知之而能好之者尤鮮也。」

十五 「我朝李文貞公之制義、以前明化治正嘉之體格、倡於國初、而乾隆年間、山左則竇東臯先生繼之。與東臯先後同時者、桐城則劉海峰大櫬、姚姬傳先生蘊、長州則彭尺木紹升、新城則吾舅氏魯山木先生仕驥、而山左則閻懷庭循觀、韓理堂夢周、皆能探求經旨、傳以心得、而體格則一範之以古文辭。」

十六 「震川論文深處、望溪尚未見。此論甚是。望溪所得在本朝諸賢爲最深、而較之古人則淺。其闕太史公書、似精神不能包括其大處、遠處、疏淡處、及華麗非常處。止以義法論文、則得其一端而已。然文家義法亦不可不講。如梅崖便不能細受繩墨、不及望溪矣。」

十七 「夫文章之事、有可言喻者、有不可言喻者。不可言喻者、要必自可言喻者而入之。韓昌黎柳子厚歐蘇所言論文之旨、彼固無欺人語。後之論文者、豈能更有以喻之哉。若夫其不可言喻者、則在乎久爲之自得而已。震川閱本史記、於學文者、最爲有益。圈點啓發人、意有愈於解說者矣。」

十八 「作古文者、生熙甫後、若不解經藝、便是缺陷。本朝如李安溪、所見不出時文、其評論熙甫、可謂滿口亂道也。望溪則勝之矣。然於古文時文界限、猶有未清處。大抵從時文家逆追經藝、古文之理甚難。若本解古文、直取以爲經義之體、則爲功甚易。不過數月內可成也。」

十九 「李安溪雖未是真道學、而所論義理自可取。而侈言文章乃殊可笑。戴

東原言考證、豈不佳。而欲言義理、以奪洛閩之席、可謂愚妄不自量之甚矣。執此理以論前人、即以是裁斷今時名士、當亦不甚遠耳。」